

## 養賢寺の台所で

工藤 美苗

(会員 佐伯市船頭町)

「これ、食べられますかね？」

突然の言葉に、振り返ってぎよつとした。

ほっさんが土色をした蛇のようなものを掴んでいる。

誰かが「大丈夫よ」と言い、皆、笑いあつた。

ほっさんは修業中の僧だ

蛇のようなものとは、年季の入った大根の養賢寺漬け

で、その名の通りここ養賢寺ゆかりの漬物だ。

修業寺だから女性がない。お寺の行事の時は檀家の

婦人会が台所を手伝っている。包丁を持った私たちは、ト

ントンと小気味良い音を響かせながら、養賢寺漬けを刻

んでいった。

養賢寺は、佐伯藩主毛利高政が慶長十年(一六〇五)に

菩提寺として創建したものだ。臨済宗妙心寺派の名刹で

あり、雲水の修業道場になっている。

献立はほっさんたち雲水が決める。漢字だけで書かれた法要の日の献立が、柱に貼られている。

「薬水」はお酒、「飛竜頭」はがんもどき、「尊宿」とはよその寺の僧の事で、「大衆」は檀家の人たちの事だと最近知った。

私たちは、その「尊宿」と「大衆」のための精進料理を作っている。私語を慎み黙々と働く。

お寺では無駄がない。野菜の屑は、雲水たちの夕食に使われる。作り方や盛りつけ、配膳の順番、時計代わりの鐘の音など決まり事だらけだ。

そんな中に入っていると、たった一日でも自分も修業をしているような気分になってくる。

芭蕉の葉にみぞれが落ちている。窓越しに見える景色に懐かしい気持ちがかみあがる。

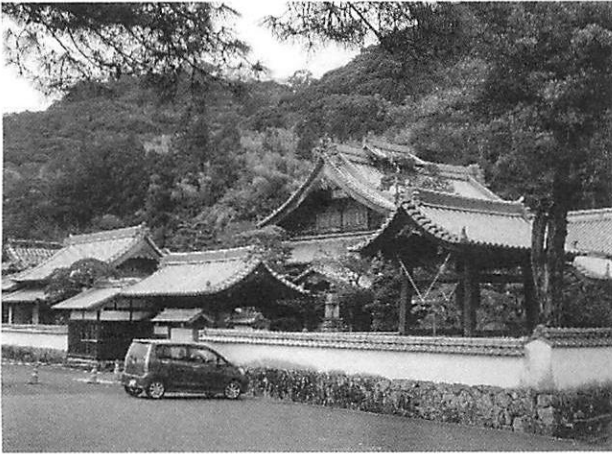
私の通った高校は、お寺の向かいにあった。授業をさぼってここに来て、お弁当を食べた事もあつたし、座禅を組んで無の境地になったつもりの時もあつた。

ほっさんはまだ若い。どうしてここを修業の場を選んだのだろう。遠く静岡から来たという。

洗い物をしながら、小声で聞きかけた時、周りが騒がしくなり、ほっさんは呼ばれて行ってしまった。

また、いつか聞いてみよう。

法要が終わったようだ。あの「養賢寺漬け」の出番がきた。



ほっさんの修行する龍鼎山養賢寺専門道場

### 龍鼎山養賢寺専門道場

この寺は、慶長十年（一六〇五）佐伯藩初代 毛利高政公が鶴谷城の創築及び城下町づくりと時を同じくして、毛利家の香華院（菩提寺）として創建したもので、開山第一祖は京都妙心寺から大観慈光禪師を招き、臨濟宗妙心寺派に属する。

虚空高々と銅瓦葺きの大屋根がそびえる本堂、その須弥壇には本尊釈迦牟尼仏が拝され、その隣には藩祖高政公をはじめ、歴代藩主の位牌が並び、大名の香華院としての森厳さを示している。

本堂に続く閑静大書院、大屋根そそり建つ古風な庫裡、方形造りの位牌堂、江湖専門道場としての禅堂、白堊塗込めの経堂など伽藍うち並び、四百年近い歴史のたたずまいを深々と示している。

本堂の裏手一段高い所に藩祖高政公の靈廟を始め、歴代藩主の墓塔立ち並ぶ毛利家の墓所がある。